
名も無き物語

ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名も無き物語

【Nコード】

N0607B

【作者名】

ルイ

【あらすじ】

日常的な日常に見切りをつけて、飛び立つものの立ちに祝福を。夢と理想と欲望と。様々な思念が交差するなか。彼等はどこまで飛べるのか。信じるものも、正義すらない中で。彼等を支えるものがなくなるのか？知りたいのなら、ページを開くといい。その時、貴方は…

0-1 病夜（やみよ）（前書き）

本文にはグロ、エロはございません。ご安心を

0-1 病夜（やみよ）

序章『灰色の塔』

この世の全ての災害よ。我が旅路に降り掛れ。これぞ旅の醍醐味よ。

ミアシン著『冒険讃歌』

黒色世界にポツリと浮かぶ白い影。小さな天窓からは口付けの様な月の光が差し込み、その白い影と壁を照らした。生命の息吹を思わせる草木のざわめきと、生物のように脈打つ壁の出す不気味な音が牢獄のようなソコに響く。

そこはどうも建物の廊下のようなだった。整備が行き届いている、とは到底思えないほど不規則に並んだ石。

「…見回りも楽じゃない」

思わず、愚痴を溢した。白い肌に赤茶色の髪、その影はどうやら人間のような。男は手に持つランプを右へ左へとうごかし、侵入者が居ないかどうかを探った。だが、男には侵入者がいるはずないことはわかっている。彼自身が侵入者と呼べる人間を見付けたことさえない。見付けた、と言えば肝試しに來た子供とか深夜の密会を楽しむ男女くらいだ。やはり、国家に喧嘩を売るような粋狂な人間は居ないか。

「…ん？」

黒一色の世界で何がうごめく。月の口付けは厚い無粋な雲に隠される。ランプの火を何かに向ける。

「コンバンワ、お兄さん」

その何かは人間だった。碧眼は闇の中で寂しげに浮かび上がる。男は、独りきりの碧眼に魅入られたように立ち止まった。

「おまつ…」

出かけた言葉を無理矢理飲み込んで白刃を避けた。少年は狂いかけの笑みを浮かべる。空からは雨粒が降り注ぐ。

「流石…」

「チツ」

男は胸ポケットから笛を取りだし、口につけ、吹いた。同時に雷鳴が轟く。風が小さな天窓を親の仇と言わんばかりに責めたてる。

「無駄だよ」

「何っ…!？」

「だって君の仲間皆死んでるし」

少年は美しいとさえ思える狂った笑顔をつくる。

「だから、安心して死んでね」

繰り出された剣撃を避ける。一瞬遅れてその軌道上に紫色の炎が上る。空気を引き裂くような、冷気。

「冗談」

「聞いたことない？ ‘凍てつきし忌火’…その名前をっ」

その言葉には男の動きを鈍らせるだけの力は十分あった。少年の斬撃を辛うじて避けたが、剣の切っ先は服の袖を切り裂いていた。切口から紫色の炎が上る。

「あぎっ…」

冷たさを超えた激痛が右腕にはしる。紫色の炎は服を焼くように燃え上がる。男は服の袖を破り捨てた。

「右腕はもう使い物にならないんじゃない？」

笑う、少年。その時、男はこう感じた。自分は…食われるがワの人間なのだ、と。だが、こうも考えた。ただでは死ねない、と。男はまだ動く左手で武器をとった。

0-2 雨夜（あまよ）（前書き）

グロあり。ぬるいですが

0-2 雨夜（あまよ）

支給品の長刀ではなく、サワラーと呼ばれる短刀だ。刃渡りは約2クレール（1クレールは10、1センチ）の一番小型のもので、彼の愛用品だ。

「左利きか：珍しいな」

少年の斬撃を避ける。が、切っ先が服を霞めた。今度は服が燃え上がる前に脱ぎ捨てる。紫の炎が床の上の衣服を凍てつかす。

「喰らえっ！」

後のことは一切考えず、深く深く踏み込んで、武器を振るった。その切っ先は、少年の髪を数本落としただけだった。瞬く間もなく、男の首は宙を舞うことになった。首のない胴体からは、さながら噴水のように血が吹き出す。首が紫色の炎に包まれる。断末魔すらあげることなく、紫に抱き締められた首が地面に無造作に転がった。命の灯の消え失せた軀は骸^{からだ}となりはてる。肉塊がゆっくりとたおれる。時間が遅くなったような奇妙な視覚の起こす錯覚。血をふきだし、やがて動かなくなったそれ。

「さ、てと…」

少年は懷から人間のテを、手首から上の部分のミイラのような物体をとりだした。何とも言えない嫌な臭いのするそれを、燭台に突っ込んだ。当然のことながら、それに火が燃え移った。

「あー、気持悪い」

そうぼやきながら、少年は脈打つ壁に手を触れた。少年の手が、壁に溶け込むように消えていく。壁はそれを拒絶し激しく脈動する。それは、人間の体内に、臓物の中にてを突っ込む感覚ににていた。少年はそんな感触に目眩さえ覚えた。

「慣れない…」

最悪…、その一字が少年の思考の中心に座していた。壁に少年の腕が完全にのみ込まれる。絶叫が壁から漏れた。それはいつたい

何を意味するのか？：やがて少年は壁の中に飲み込まれて、消えた。
鳴り響く雨音は空の涙か。涙だと言うのなら、感涙か、悲涙か
…。

轟く雷鳴は絶望の複線。口付けをほどこした、あの女神はもう
いない。無粋で、冷たい雲に覆われて、愛しいものを見守ることす
ら出来ない。

燃え続けていた紫炎は、既に消え去っていた。

微かに香る血の臭い。誰にも届かぬ最後のことば。

何人の思いも等しく抱き締めて。

雨は降り続けた。

雷鳴は轟き続けた。

風は悲しみ、歌い続けた。

女神の口付けの代わりに夜の闇がそっと、抱き締めた。

夜は更ける。新たな、物語の始まりに向けて。急速に、静かに、
優しく…。

世界は、悲しみにくれていた。そう、王宮の詩人が歌ったのは、
ちょうどその頃。人々は、歌の終りを知らない。

0-2 雨夜（あまよ）（後書き）

楽しんでいただければ幸いです。感想は励みになりますし、何より上達したのでよければお願いします

0-3耐屈(たいくつ) (前書き)

今回は、主人公の登場です。名前はまだ出てこないですが……。そこはご愛敬。では、ルイの不思議世界をおたのしみ下さいな

0-3 耐屈(たいくつ)

昨日と変わらない今日、今日と変わらないであろう明日。友人との他愛もない会話。教師との隣人との冷たい意思表示。両親との情報交換。テストの結果。ニュースキャスターの読みあげるニュースとか、あるいはブログや掲示板に載せられている種のニュース。新作のゲームだとかリメイクされたゲームとか。棚から引っ張り出してきたゲームとか。正直、うんざりだ。教室の最前列の席に座らされている男子生徒は本日五度目の溜め息を吐いた。

「なあ、今日ゲーセン行かね？」

「行かね、金無いし」

茶髪の学友の誘いを冷たく断る。窓からの風は冷たい。もう、秋なのだ。

「先月もその前も金欠だったじゃん。今日こそ俺のクレインサバキを披露してやろうと思ったのによオ…」

「悪いな」

学友は溜め息を吐いて、男子生徒の隣の席に座り込む。女生徒が寒い、と呟きながら窓を閉めた。教室にはまだ十名近い生徒が残っている。彼等の多くはバスや電車の時間待ちだ。傾いた陽光が窓からさしこむ。

「別に良いけどよ…。親父さんのことはアレだけどよ。親無しは俺だってそうだぜ？なあ、そろそろ前みたいに遊ぼうぜ」

「そうだな…。だけど、どうしても終わらせたいことがあるんだ」
学友は納得したような、していないような複雑な表情を浮かべながら立ち上がった。アナログの腕時計は彼が兄から貰ったものらしい。それを彼は顔をしかめて見た。遠視が入っているのだろうか。教室の時計は五時をさしていた。

「もう、バスが来るから先に帰るわ。一人でゲーセンは寂しいし…
バイビー」

「またな」

学友は明らかに軽そうな鞆を担いでいそいそと教室をあとにした。不真面目で、軽薄そうに見える彼は時間にだけは厳しい。男子生徒もまた、立ち上がって教室をあとにした。狭い廊下をノロノロと歩く。生徒達の数もまばらだ。歩いているとちゅうに誰ともすれちがわなかった。階段を一段飛ばしに降りて、下駄箱で下靴に履き替える。自転車置き場に行く途中に誰かのサドルが転がっていたが無視して家路に急いだ。

鍵穴に小さな鍵を差し込んで何度もガチャガチャと回す。少し前に、鍵を学校に忘れたからといって針金でこじあけてからどうも調子が悪い。十分ぐらい鍵穴と向き合っていると確な手応えを感じた。ドアノブを捻り、ドアを開ける。家の中はシンと静まりかえっていた。都心ではないが駅に近く、スーパーもある。なかなかいい場所だ。一戸建てで、屋根裏部屋もある。その、若干広い家は独りで暮らすには広すぎた。生活は特に不自由していない。小説家だった父の印税と彼のバイト代のおかげで。けれども心の隙間を埋めるものはなかった。

「…はあ」

テレビの電源を入れてから、父の書斎へ向かう。ギシギシと軋む廊下の先に、鍵のついた扉があった。それをゆっくり開ける。油のきいていないドアは、隠鬱なレクイエムみたいな音をたてる。全てあの頃のままだ。このドアの先に父の広い背中があって、こちらに気付くと、手を停めて一言。

「おかえり」

そう言ってくれた父の姿はもうない。その姿を見ることを期待して毎日のように開くが一度も父の姿はなかった。仕事机の上の木箱と書き置き。今日、調べるつमりの本をとって居間に戻った。

0-3 耐屈（たいくつ）（後書き）

耐屈、退屈に耐えるというようなニュアンスで。
次は頑張ってもっといいものをば。ご期待あれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0607b/>

名も無き物語

2010年10月23日10時47分発行